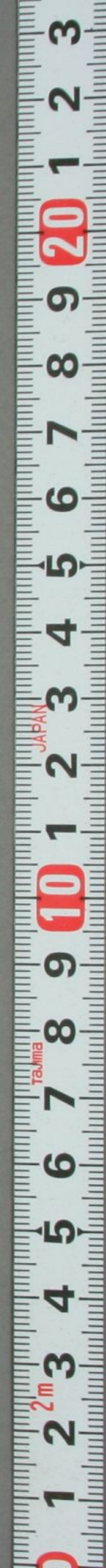


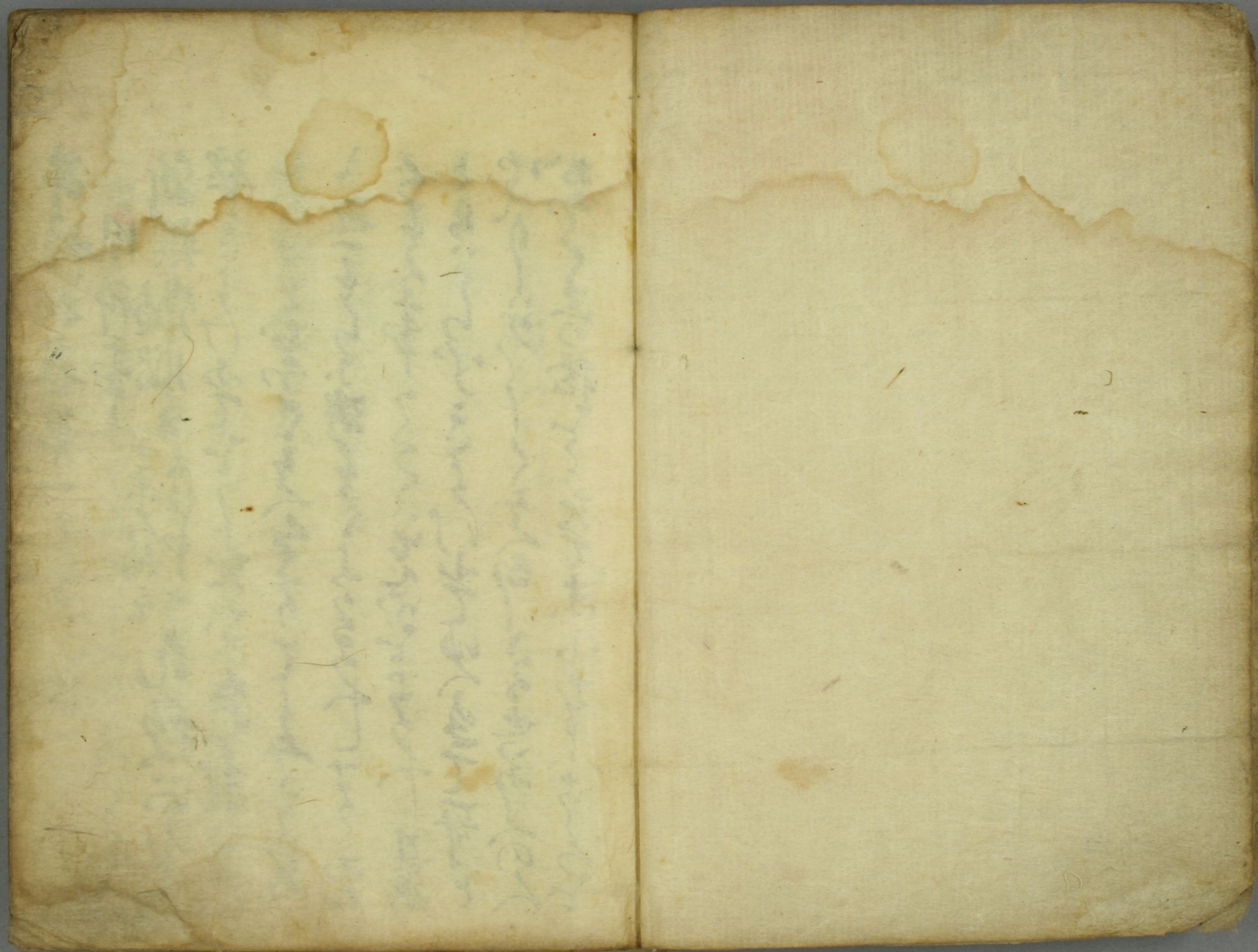
~ 4
995





墨付百廿七





井哇抄卷第一

風神事

新撰髓腦四葉之細云元秋ふ少く

婆とくけ少てとうたまふまと勝らり

ましとおちくらくまりてまららむ

ままららむまくようまらしすうころ

らまららむここいえのころと其際

とまららむまくけおてゆらまて哥と

安りいまらくらくまりてまららむ

おちくまの花とまてまららむまららむ

ふじららむまくまららむまららむ

ひらららむまくまららむまららむ

こまららむまくまららむまららむ

ふまららむまくまららむまららむ

らまららむまくまららむまららむ

後物口竹らまらむまららむまららむ

こまららむまくまららむまららむ

むまららむまくまららむまららむ

いまららむまくまららむまららむ

らまららむまくまららむまららむ

く——いとおかきもあてそそたうあは
むうあつら内ふまた又うらうあきこく
面白ふ一のいするう——あきこく
あううむい哥い母のい書ふおちあけ
ふあうくあう——まも合む集といふあう
その集ふよの哥い——いあきこく
うらう哥いふりまきそまきとあううて
あうとえさるあふこあう
十日未風折え夜のうた——といふと
ていふ系大袖言え任弭いここのそあ

集と名付之通俊卿の後拾遺の序
小洞いああのいこくふあ海うりいあう
あうこいああいこあう——と弭ぬ
あうのいこくあうあういこく
あうなり——海うり——あうふあ
ふく勢あしあああしあういゆああ
あうあうあういこくいあういこく
あういこくあういこく——あういゆあ
あり詠教大括被進後あういあう
ていあう——いあういあう

あつたこととめて是とらむむ詞いふこと
とそと地ゆかし詞の三代集とあつた
風神す働堪能先をま考らう不端者
今ま出らう地教をいれて其神を
あつたあつた又云常に古のの京氣
と観念してつふふをむむあつた
見らるあつたあつた今伊勢物語後
撰拾遺世六人の集の中にいふと
子の哥とつふあつたあつた丸貫之
志岑伊勢小町等つたあつたあり

和歌の先を述ふらうとつたあつた
の京氣世間の盛衰地のうとあつた
つたあつた白氏集のあつたあつた
常ふをりしてあつたあつたあつた
歌のつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
小古風とあつたあつたあつたあつた
そとあつたあつたあつたあつた

新撰龍腦玄のあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

下れ京方のいふ事をもききまは日るるにその御代に
ありて新恒中ひのこよせの人の
のよむいば人のかりまあり

賀之入事

あひまひつらうゆきをたぬの風

新恒教

つら宿のたえそに人多いあるむいばを

高成教

かきふむじつあふはひらき月と運ぶじふとあふ
はつにありて教の中れ中務君ふらふ人せ

はの國のさうれ格も信也今が勇とあふそつじ
そは伊勢のふらふとあの中務君ふらふ人せ
らやうふとつらふとつひなり

急ちとらつらふとつひなり
そは源美良父のえ猶ふとつらふとつひなり

つらうにまのこむをこふと

後成御事

み系三ふとの合判まのこむとあふとあふ
て繪師の繪の具とほくつらとつらとあふ
のらとあふとあふとあふとあふとあふ
あはらるる

かつむるふもふとおちしてとくしを
きこむるすうころむむらうへいといふ
中ねの月やらぬとくみ紀君とのまは
にうるとつひをたつるやうなる
系極中納言被進右権舎府將軍物云
近代乃人のそとちひあつる風情を
三十一字にうつるもんとく成るたを
あてはくふすうこの物のおとむま
あつすこせにいりて世のまはのま
そとくい田ま乃花のうもといはり

商人の鮮衣とぬちりてとくしを
こゝろ納言信卿後頼朝長た系
大ま頭補信物長比くこゝろ父卿
別このたとるこゆるる基後と
くろ人いさるとまの世のりやま
姿とくちかき常にゆりまのつと
祢ろりいんこのまいつてとくま
そつたつこ世あといふいてやゆん

大納言信卿

大納言信卿のまはつてまはるる風情

末の氏ははる〜とてふ秋風やみすましの
奥は風吹くも〜しむるのちのきりえとてふまんじ白

後札の長

の標美あり〜日〜りる本はあゝるもあはれ白
あらしははる〜ら〜ら〜のあはれをこほはれ
いせし晴のころあ秋のち祈とや〜とや
移さく梅の入りぬる風はあはれはるあはれ
あはれにあはれをこほはれとてふのふはれ秋
をこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ
あはれい〜ら〜ら〜のあはれをこほはれをこほはれ

あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ
あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ
あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ
あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ
あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ

題詞の長

あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ
あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ
あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ
あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ
あはれをこほはれをこほはれをこほはれをこほはれ

心いへんかあへあつじとすまじし
熱あつとあつじありそと熱あつす
いそそとあつじしとあつじあつ
あつじあつじあつじあつじ

回の物あつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ

そとあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ

又そとあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ

定家 神事あり **被送** 西ち長 秋葉並杖ち先さつに共和國
の風をそゆるとに先格とくちあつじあつじ
あつじあつじあつじあつじあつじ

いさしそをんしゆらあふいうふおそを
あしおらまじしとこつふ積つまじ傳
ずらまはるそらひそゆらそまじふ
なよりやはしきたよ月よあそ
やうの物とおそらうそまじふ
何のちんうゆらんそそまじ十祈
の中になつまじとあま様ふそそ
の女とあそあまらうすうそまじ
まじめそあえうこつこまじ
ゆらそはやくつこまじ入るす

うくふそすまうそ其一壇より
ゆらそそまじあまらゆら
ゆらそあまらうそまじ
いそらうらうのうらうのふそ
あまらうふそあまらうそ
ゆらまじそあまらうそ
果同あまらうそこのあまら
まじらうそあまらうそ
ゆらこのあまらうそあまらうそ
まじゆらそあまらうそあまらうそ

私言のむと神と云事らんくくつぬるに
事あり近日の人の風情のあらう
く真ありてそくくつうーそく
つありとおつりあふふあつること
あり風をそよ木の感ふつあつこと
世間盛衰ふとふつあてあい入るると
ふことありあり故戸部やまも
秀方之様あらう本下風の秋風情面白
目出ふ友あつことことことこと
乎といやあつす遍昭僧正出家の

の河あれよのしん

引く地祇いれそくそくむのつらあ
こまこまそくそくあつら
あつあつこまこまあつらあ
あつあつこまこまあつらあ
あつあつこまこまあつらあ

六百番 哥丁合 餘寒

たぢ 朱子 終 卿

村さむらあぢあつらあ
右 中宮権大夫

あふつとをいひおれしとるまかてまごつて守はれど
右方中もまたこの初ふく字にむらふあふ
しと進する念ありた陣を初ふ
字ふ是字とくじ事不可勝斗
た方中も北極

いも首哥了海に優ふしそ見しゆめ
まはつこの出来の哥うらみのうら
海河いあまうらうあうまふら偏曲り
微ぬの風情と不盡之ふらう
くさるのうらうら申之糸不被有

の事しにや他右のこのあふのとくま
あそとつたは詞今もこうしあふ
あうやゆえんとんてゆと末のう
りくゆえや勝負不分明欽

廣田社哥合述懐

た

實貝家

昔よりゆらゆら田の神あふさうらう林の心
あふえ

右

登蓮

あふそと我世のあふといのあふらうあふさうらう
たのあふらうら田のあふらうらあふさうらう

ゆる中に林の心とくせられてゆるまとい
ととくししくしとゆるまといハナ将テ林シ
作テ林ハ心ハとつる詩のつる下し右の
詞小花とくせり文小玉とつら
ささしとつる文字もくもふとて
てとくししくしとゆるまといゆるまとい
其詞無詞文之偏質者其神也神
多て是の心とつる詩のつる下し右の
ささしとつる林の心とつる詩のつる下し右の
ゆるまといとつる心とつる詩のつる下し右の

ゆるまといとつる心とつる詩のつる下し右の

風行の堂教濯川乎合

た勝

とつる心とつる詩のつる下し右の
判云右のつる心とつる詩のつる下し右の
たつる心とつる詩のつる下し右の

同哥合
た勝

花小を心のつる心とつる詩のつる下し右の
判云たつる心とつる詩のつる下し右の
ゆるまといとつる心とつる詩のつる下し右の

同身合
た勝

吾輩のやうな物と云ふ力と花あふふらわゆる
判またたうとらふこそしう勝とやういふ

同身合
た勝

山川ふ性とふまはるしとてはらふはあふのふ
た

おほの道の中流とてふふと月みるやと
たふのうらふく然ふまはらふと

たふの性といふとふふと勝とやういふ
和をわらふふ世ふ世ふ合ふこととふく
てしうらふとらふ事三和にふれたり
判者中言ふ後してはし

順徳院四百首

美しうとたふくふた物と判らるるのふ
ふふにやふとふふとあかしくゆり
はるふはつてと三代集ふとの海
以物とすうととこころくくめ
好ひ業うはるのひく

系也一印はあしね浪もわらけりけの春のまきぬさう
又句北新造風情始る由來以み此事殊
難む令悦目以

りまてしあゆめ玉くけに村山のまきぬさ
又句廿一字悉秀逸必擲玉光明

照耀殊勝也

人ふくね先本とるふりあしにみろの海の杜の翁
以廿一字又每字難押感嘆以言
言尤ふ元上以歎

中務卿親王文應三二り首ふ

喜羽山花雪のじまを坂の南のあふふま
毎句美麗小くくくをけりま

くみ(珍室)

あふふく風わつる海のまふふくやふあ月
月くかやにやまふふくくくくをさ
くみ(珍室)

南流撰者初度撰之時自詠と撰
入らまてしあゆめ玉くけに村山のまきぬさ
風神本撰之方よ書おあり
千載集小撰者三の初十一首あり

勅定ふりて丹心首と加て世六首
也十一首殊玄之云云云云

皇太子者之有又俊成

今一歩の靴の盛と云ふ事云々の事
名も此の秋風力のみ絶也
月と云ふ物の事云々の事
備は云々の事云々の事
教らる事云々の事
多うと云ふ事云々の事
この事云々の事云々の事

此の事云々の事云々の事
任徳と云ふ事云々の事
此の事云々の事云々の事
この事云々の事云々の事
新古今系抄云々の事
被入之間北自撰仍勅撰云々の事

控中細言定家

谷と云ふ事云々の事
久里桂云々の事云々の事
天原云々の事云々の事

老らくくれ軟の尻る世と彩りわらうまう
おまその志を命に成ふらう月も地也
そのまうかぢい俺わらうまのわらうま
陰奥のゆり地の鶴いぬの波をゆらうま
續拾遺 初太細言為氏

送る林葉いそこと尻わらうまのよふあうま
おまといく世のまうらうまのわらうま
春のよれ鳥の向らうまのよふあうま
今らうのなうらうまのわらうま
新巻と寸月の花といはてふらうまのわらうま

おゆの浦や開のたうけてと波を月波守林の塩風
おまのよれ鳥の向らうまのよふあうま
おまのわらうまのわらうまのわらうま
ほれ鳥のわらうまのわらうまのわらうま

餘情

志冬十許に餘情許

わらうまのわらうまのわらうまのわらうま
今らうのわらうまのわらうまのわらうま
おまのわらうまのわらうまのわらうま
おまのわらうまのわらうまのわらうま

留の原千鶴をて漕おんをいひてはまの物
は神河標一斤も義等万端

四糸大袖を和服九糸

とおとこといふとあまりののほりあり

おのこらうこれ浦の物等にほるまじり
まきといはけりちやうかやあてとわらぬ

十一お中といふはく竹のこいあはり

みふふあまはくしああはたのうららけは

お取の用は清ふふおんて今や月を月

目吉社舞合興書云女家おわらう結成とつと

うたゆーといひこの物といひまうんとま

まもといひりぬさうといひてくうらあ

そらふもたらあふらあもはつとあ

物ふも出まあもはくはつとこれる

うたふふありあまし其河津介に系

気のうらひうらやうまのあま

そしういよまのたのうらうあ

川村の月のまうふふあめいあ

のあふまきの風いあひあ

うらうらうまといふとあま

うついでそつらあり常に中へしついに
と月やわらぬまぢわじうのこいひ
とれ常はむららむとつらういとあくる
そくきこねるるありりやうまの安ん
らんひちじとおもふ心はつこい世ふ
わりうつ死とあるとは地ういさう
このこ名しゆりとも

六百番 命 残暑

た 信定

秋あき秋日新よふあきさうらうの朝の森のは

判云たのまな情之并ふゆふし
すくして可く為す

千六百番

た 二家朝臣

何ふふかかぬの気は松林風そく
系極美門判云たさの雄似る
可謂奇殊事

井蛙物巻中二

取在秋事

心雲四抄云是卷一のたふ事よるに
見ねる事也志つらきことよきこと
ぬんじあること結をことわりよる中
少しゆつとつえさるゝとありは中二の概
五二詞とをてつと久二つふことりて
物とるるもつらり詞とをて風情と
そらりうー風情とを事な見落
つとつらりて物とる事な見落
つとつらりて物とる事な見落

目一巻一とくふつあふことよる
百葉集の宿の概つたそらりとつた
屋一ことふふじつらあぬうとつと
とつらり是つ詞とを事な見落
つとつらりありつとつらひはつは
寸詞とをてつとつらつら又おち一
葉集の身かこととつたつたを
あつとく寸詞とつてつらつら
人つとつたつたの事な見落
つとつらつらつらつらつらつら

その中にむすいありし一々身ににきり
て是とをいふると詮ありてわが魂
ふたつをいふくはるの魔ありたこの
じつとて近代後物たるものなり
くは事事成ふるなりをいふと
近き教とをいふはるの事とをいふ
わが魂とをいふはるの事とをいふ
たはるの物とをいふはるの事とをいふ
と祈恒とをいふはるの事とをいふ
とをいふはるの事とをいふはるの事とをいふ

かりせむとていふはるの事とをいふはるの事とをいふ
しとていふはるの事とをいふはるの事とをいふ
とをいふはるの事とをいふはるの事とをいふ
うらふとていふはるの事とをいふはるの事とをいふ
事とをいふはるの事とをいふはるの事とをいふ
ふとていふはるの事とをいふはるの事とをいふ
はるやとていふはるの事とをいふはるの事とをいふ
みはるはるの事とをいふはるの事とをいふはるの事とをいふ
わが魂とをいふはるの事とをいふはるの事とをいふはるの事とをいふ
よとていふはるの事とをいふはるの事とをいふはるの事とをいふ

ここの事らめらんとしておそらんた
万葉の詞よらんたあつて
物いふもよらんたあつて
すつ—あらんたあつて
向ふといふらんたあつて
可たらんたあつて
難らん事らん

被進規井—文抄云古歌古被免て
つ—たらんたあつて
三句小よらんたあつて

あらん—二句のらんたあつて
た是と案すらんたあつて
古舟の詞と詠らんたあつて
とらんたあつて
言事らんたあつて
難のよらんたあつて
らんたあつて
是川のらんたあつて
らんたあつて
らんたあつて

イ 昔のよもひはなほみづのうへに
イ 昔のよもひはなほみづのうへに
イ 昔のよもひはなほみづのうへに

イ 昔のよもひはなほみづのうへに
イ 昔のよもひはなほみづのうへに
イ 昔のよもひはなほみづのうへに

昔のよもひはなほみづのうへに
イ 昔のよもひはなほみづのうへに
イ 昔のよもひはなほみづのうへに
イ 昔のよもひはなほみづのうへに

まづ海より入つてまをらむらもきつるのむら
一の板舟なるのいふありらりてあつてもまふ
ゆもつてもしよとしてあつるつらふらつるつら
い拾遺書の中にて常にいふにあり

ちとて板のちいふあつらふらつらまの月

照らしおとすいとそあまの月影月とてあつる

めいあつて神おのちひはつらつら海にわさる

俄ふとほくらるるつらつら海にわさる

さつらつとの麻のさつらつらつらつらつら

秋風のそつらつらつらつらつらつらつら

若れりつらつらつらつらつらつらつらつら

若れりつらつらつらつらつらつらつらつら

秋のつらつらつらつらつらつらつらつら

場はつらつらつらつらつらつらつらつら

若れりつらつらつらつらつらつらつらつら

秋のつらつらつらつらつらつらつらつら

島の神のつらつらつらつらつらつらつら

島の神のつらつらつらつらつらつらつら

若れりつらつらつらつらつらつらつらつら

若れりつらつらつらつらつらつらつらつら

有号
いんりーららわつるかよとてあつたはるるに
ふんばたむらじとてあつたはるるに
信実知信

老とある物とありぬあるとてあつたはるるに
本月とある物とありぬあるとてあつたはるるに
あつたはるるに

一取古名三の句事

廣田社哥一合 本字宣

三取ふま塩ちとてい淡たつるは
み系判云た三のともてい
ゆると下向やばはるるに
ふかとりつる者とのりてい
かてまはるるに
凡も事の事あまこと
とて事いよとあつたはるるに
私と恵慶能周とてい
きとてゆりりるるに
あやらりての人の事にして余の
世の人の事いかりとてい
楊あつたはるるに

楊あつたはるるに
世の人の事いかりとてい
あやらりての人の事にして余の
きとてゆりりるるに
私と恵慶能周とてい
とて事いよとあつたはるるに
凡も事の事あまこと
かてまはるるに
ゆると下向やばはるるに
ふかとりつる者とのりてい
三取ふま塩ちとてい淡たつるは
み系判云た三のともてい

新古今

横なまきの山色にうかりけり世はなほさかすけり
一七六の句取の事

鴨長明の清和の御教を小嶋藤
とらふゆへに

今之と書や契も月のまめの月集とて
は教にさうやゆへに勝ふたれ
と定家朝長も御座とてらぬと
素性のよのふつるふこ句とてつりて
ゆきしやうふおちくゆいる教は其
句とたててとらふと下に

かして作あつてあつては
いふものごとたててむねの句と
法句とらふてとすべし

系極詩進栗木田口大納言 基昌卿 消

息之近來諸人とも名譽之出を偏
好に以て一板風情盡之時自亡力不許の事

三代集已下古の之の句とて後用自其
事同意同の殊禁制に方集集古の
長之の旋頭教等之の句は其難不可淺
之中やいへば每人詠詠之がとて事

家隆卿

伯樂のうらむじとて探れらるるりし者の白雲
中書 嘉考のうらむじの探れらるるりし者の白雲

花宗卿

いふはまわらうらむじとて探れらるるりし者の白雲
中書 嘉考のうらむじの探れらるるりし者の白雲

如母親作

中務卿親王清のうらむじ

多野山花のうらむじの探れらるるりし者の白雲
民部卿のうらむじの探れらるるりし者の白雲

久保のうらむじ

多野山花のうらむじの探れらるるりし者の白雲
和云ははらうらむじの探れらるるりし者の白雲
表之詞可謂不實

九条の内府のうらむじの探れらるるりし者の白雲
古のうらむじの探れらるるりし者の白雲
先在無念之由はなし

六百のうらむじ

右

家隆卿

多野山花のうらむじの探れらるるりし者の白雲

たかこよふ事壯由りさ判ちたふ
素性法師の **あふ** くらまの **い** **あ** **ふ** **あ**
むせしてその **い** **あ** **ふ** **あ** **あ** **あ**
ついでついで **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
ついでついで **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**

た勝

たたあ

注とらふゆと **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**

あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**

あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**

あ

雅集

あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**
あ **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ** **あ**

同被合

た

有家朝臣

物日影うつら山の梅花つまふくはぬ香のた

た

定家朝臣

梅花うつらふまふくはぬ香のた

た物日影とと死つまふくはぬ香のた

想人風情とととくく竹木した

うらふまふくはぬ香のた

力あつぬりあつらふくはぬ香のた

物日影とと死つまふくはぬ香のた

竹木と想人の明

物日影とと死つまふくはぬ香のた

物日影とと死つまふくはぬ香のた

同教合

た

季能卿

物日影とと死つまふくはぬ香のた

た

俊成卿女

物日影とと死つまふくはぬ香のた

物日影とと死つまふくはぬ香のた

物日影とと死つまふくはぬ香のた

つろふのゆへに管見の者らうく不え
こつすゝをゆき万葉集にこそその
山歌ふつろく様ふとつろやうにお
あしゆりたといこある事ゆき祥と
すろこ詞こつあぐいゆふあ大つこ
万葉集より一たやうある事とを
誦ありといそをうたおあしゆき
臣勢のまきと志力をこつゆふ
まこふあつろいそやな事するふつこ
て右勝てゆふへいん

六百首被合

左勝

三歌

つろつろのまの命にむふ物とおと
判ちた命にむろや万葉集あしゆ
ゆきと殊不可庶幾や

愚心長抄云 涼美法眼 万葉集凡事

實治百首小 正三位知家

こつはつまをらふ心をけらのあつたあ
いふもやまの世の秋風ふ涼葉結つと
是の由家小中こつみてぬ万葉集の右

所をてしるる路ありはしるり奇其
しるしちやくもさしり

光後御長

出向のらるは風をたけむるの意今盛
味チカラの神光向の名旁に白くはるる地
手振神のて海小舟あてる海舟目とて
大津チカラの神と名乗るれと百舟とくす
是るとし丸配土佐國之町とて北吉事
文永二年龜山殿又首三つ合
岩倉のとり林つ立而れ時とて麻の書あり

カニ岩倉のとり林つ立海りやししるるや時とて
是の書ありと有憚りあり

しるる初漕舟のあつるは淡路
舟チカラとて名乗るは淡路の舟とて漕舟あり
舟とて取違はしるる舟とて舟とて
安年チカラに立とて秀逸とて南家はとて

舟中細云定家

白くはるるは白くはるるは白くはるるは
白くはるるは白くはるるは白くはるるは
白くはるるは白くはるるは白くはるるは
白くはるるは白くはるるは白くはるるは

かきり

多々々後々々あり三掃の造りのわたりにまじり

こぬくとるすの浦の名かまじ焼やもらひの力まじり

新勅撰

善業才二深塩焼の長海未通女首夏時之

おもしろい夜ふもまじりく竹のおまゝ人のまじり

刺竹のたまゝ人の家と行佐保のふとまじり

海色色川細 是二位家深

波風とまゝる世のまゝらひて細の浦人くまじり

細能浦之海處女まじり焼塩の念首日而焼各下

是等小女まじりくまじりく河實治の後の

教人のまじりくまじりく風神もまじりくまじり

百未風神ま方葉集のまじり結のまじり

死て後へまじりくまじりくまじりくまじり

一物終る取本教事

後名羽院の取まじり合のまじりくまじり

まじりくまじりくまじりくまじりくまじり

中志り別の極まじりくまじりくまじり

おもしろくして病ふくまじりくまじり

のまじりかまじりくまじりくまじり

こゝとやうな事をして世の事の上の公
と二百首の事と云ふことにはいふこと
ふまゝと近代に其ゆゑあり

六百首教合蝶勝 女之居

写蝶の羽小とく教合林けて本陰源と云書
判また云うしふとく教合林けて
ふとつる波羽殊小熱ふとく一
ふふたを為勝

同教合枯野 女之居

4 林と何ふ熱と云ふ原と云ふ事の事

たや云ふ事の原と云ふ事判また何ふ
熱と云ふ事の原と云ふ事熱ふと云ふ事
たや云ふ事の原と云ふ事熱と云ふ事
あつじやい素式部と云ふ事と云ふ事
物書集と云ふ事殊勝と云ふ事花首安の
事と云ふ事熱と云ふ事あり熱と云ふ事
と云ふ事と云ふ事送恨事と云ふ事

千六百首奇合

た 後成野女

新と云ふ事花の事と云ふ事月と云ふ事と云ふ事

右秋花の市左のえあふまを思ふは
さふ女人のちりやうにいとえ
ふんしゆりうに持ふゆし

聖女書と菊とえあふまを思ふは
やあふ

三法百首

たあ辰

吉野川若りあはれたよりしを思ふ
藤下さ

源氏歌

あふまを思ふはれつゝあふまを思ふは
あふまを思ふは

井筒抄巻第一

代々宗近不度衆りの由初申し
つとらり或は優美あふまを思ふは
義理のこころいふは
あふまを思ふは
ていつらまはさし
後学末生禁制の詞と右封て書物
てはつとらり
まふも佛の制戒あふまを思ふは
法曾律あふまを思ふは

源を以て記すんまこといつてのらやまら
とて先きののいましめをせしむる盤解
その故代との用控管長見のそま
かこそことあることとそふはこそ能
簡とくつていせとゆりこせとい
「ふらめ

中務卿親王文應二百首
村をたふまといつてはつたをたふらふのよ
氏部卿入る初り云是といふせら
少てはれらひのら事次ふりといは家

いよ教らり事「ふらめいふのしり事「に
作し「教といふおふらとそ物列ふ
振ふ其神「不祿之由とて父まら
作又神「回句といはくくまにそ
六百首「身「金云

枯野

有家朝長

いよのたふらふ「立神「祿まをそ
判「ふらめ事「そ「そといつて
と「祿まは「ふらめ事「そといつて
をたれとすつて「祿強ふ不可「庶「や

同ころ合

有家朝下

其の原まきうらんとぬはかこゝろはかこゝろ表雷れ曙
判たまき原ととくろりり雷れ笑ゆると
此らめ共とと河の遊来見えゆ未申公
笑ゆる定て憐心小ゆるらん雷れ曙
比くしりつ子の事にもまらじやゆん
奥位と人勅進百首
定家朝下
ふしきりおろし詠のこのふしきりおろし
たちち原家朝合 表原の月

表とがうらひむせゆもひふしきりおろし
六百首表のむせ

た勝

定家朝下

判たまき原ととくろりり雷れ笑ゆると
此らめ共とと河の遊来見えゆ未申公
笑ゆる定て憐心小ゆるらん雷れ曙

同被合 表曙

た祐

女房

見ぬ世まを思ひあゝる詠り昔いりしまき表曙

右

信長

あしおちのし海小舟もそつ宗跡も善く晴
判ちあ首春晴た首小舟あとい
た宗跡まといつる宗跡まといとい
らた持小舟也

一之

中務卿親王文應二百首云
おぼやけの表小舟あも秋の夕の村あのか
民の卿ちまはつ決る小舟といひあとい
とい洞海不可好海之由七又中とい

洞海録云

おくらふといおちといえもる山風まの先きて小舟

字といお小舟とい

法眼

法眼は美為家子也

物言中野禪尼

後成卿女

建長元年に宗十八郎の文といふよりて

おぼやけといて我はつといさとい一実のつとい

いふといてあといはつといつといつとい

あつおちといておちといといつとい中い気

といつ洞好といつといといとい先い小舟

あといおちといつといといとい今世い將

人之物とて漢語と不可好誦事也
六百首教合 枯也

た

際信朝臣

教枯の事人の事たを及んや枯の事ふらるる
判之たを洞あへん見たるにや他なる所は

六百首教合

た勝

女之居

六百首教の事にはあつてあつたは其の事也
たを事の事ふらるるにかりり
ふんらるるにをわかしゆ也

同守令

二宮

六百首令ふらるるに事あり
京枯判之教の事何よりくはる也
六百首令合之 賭射

た

家際

あつたり事いふに事あり
判之た後舊儀之由るにたは
ふらるるに事あり何となく朝儀
あつたり事いふに事あり

外位上人勅進百首

約多親ふりふ年の心もまよふ心もあはれ

中務卿親王

中ふふふふふふふふふふふふふふふふ

民部卿を是又とふ打つてやむ

私言治る地新中し此事も其其め法

吹あふり

中務卿親王

民部卿を是又とふ打つてやむ

私言治る地新中し此事も其其め法

之由七文様中し其法も加刺心作

中務卿親王

民部卿を是又とふ打つてやむ

私言治る地新中し此事も其其め法

之由七文様中し其法も加刺心作

中務卿親王

民部卿を是又とふ打つてやむ

私言治る地新中し此事も其其め法

之由七文様中し其法も加刺心作

古よりあはれ録來作近年志るべし
作詞り一うたへて事にいひてのひま生
初学每人一首毎に加ふりしるふ
篇耳して厭都く思作

八雲清抄云定家志るべし成りて
嵐ふ嵐吹ありにてのふゆとつる菊
のちりきふらうしるふこのじよふじり
八云家持卿志るべしことんむい
又ふくろ秀教を祈してはまに
わらふこといしてあるべしを傳ふるふじ

八云家持卿志るべしことんむい
又ふくろ秀教を祈してはまに
わらふこといしてあるべしを傳ふるふじ
八云家持卿志るべしことんむい
又ふくろ秀教を祈してはまに
わらふこといしてあるべしを傳ふるふじ
八云家持卿志るべしことんむい
又ふくろ秀教を祈してはまに
わらふこといしてあるべしを傳ふるふじ

字くく可憐信者致

升又百嵩哥合 顯昭

おゆふ花と雪とを分りに風をまうま

た秋風はまらまの曙とつらむ

くくをゆらま

秀純のまらまのま首り

定家

まは風初雪まらまの海橋のま

正治二年九月院教合

曉雪

曰

四つ指おき世を根のまら白雲の山は

二字秀句勢のこくく事

中務卿親王の御歌

電のまを山のまを橋のまをま

民部卿云海河跡まは山名の

尾とまは然北中ま

同清之詠云

山名まこの橋小鏡まま海の秋の月歌

山名ま緒乃事まおま上平是又

海河ままこま歌

「まより

六百七十一合

た

季子経邦

おじまてするま標ま炎野風雲のうらみ
判云たえつのはゆらうらうらさ標を
ゆるするまはじまうふらうらまうら
洞不可度業もや

同教合た

顕昭

この世ふらうらうらゆらゆらうらうら
判云た教者まうらの洞うらふ不足

字はゆりたうらうらゆらうらうらゆら

同教合

た

龜宗朝長

おつら花とゆらうらゆらゆらゆらゆら
たゆらゆらたうらうらゆらゆらゆら
判云たのゆらゆらたゆらゆらゆらゆら

西に清宗濯河三合

た

足川の山陰ふらうらゆらゆらゆらゆら
判云たうらゆらゆらゆらゆらゆら

やむ但は便ふとつる詞を又んごうむじとふ
まと程ふふくやとおやしゆらうやうれ事ふ
るうてつふふへき事也然らま一力あふふを
はわてふやあうありえ

「あきいらな」

毎三内府四哥一々

おく山の若の松生の物らけは京栲竹ははる部
京栲竹の鳴風と七字に誦は内むけの風
こととらん此言ふ正字にあきいらあふはは詞
程三字小誦てあの子書書加之内七字

八字に成はひゆらうくはひあの子とて
小つらひは事感不事念思感作
此一語見ふくこやうにんてふ力案小朝
曙と書てあきけとらうてはと未は傳
るる物にあきいらなとらふふらうてはとま
つらじては教よにあきけとらうてはとま

「あふりか」

西行法師堂表濯川哥一合

あつらふまふと志建こまをさうかに身とへはる
判らたらうとらうこあひるひて見む但

人をうかじとて不測に我人にとらむ事也
こいりりかゝる形その合こそ絶ふひふ
きいふやわらんるの程ふくまへし

秋 笠田府哥ふわりもれうわふ

京極之は河自地階北然石録
事いよりけそる河ふい

順 陸院沙百首

花多のふふま風をたてあつ山の端月
空のたえ梅園神録之山川より
もろく時月之京と氣燈五所之出越

見こころのゆけりい歌

浣 六十首

月照野あり 定家

秋の月神ふまきみ歌ふくわつふまふ布の
持大納言家二十首

接 伯 定家

こたふせしきうの伯の和風まうくふたいつく書

大納言典侍早世河

為家

いふしつこいれなるたつらふいふいふあふあはれ

因裏秋十の首秋合

定家

おん御心は民の業業と云きつたさく田の秋の
朝後撰

法中下定家

けうふくともいふまじし月も世果るのや
六百のあつ合

定家

あふ霜叶のぬいのろくもまきい風と恨はる
忽倦て我とらうりく書とらばまじのたか

又治百首

秋寸く花橋と吹風の列るやうあうの神
一はうと

秋笠田府田三の文時

系極ち東緒古今秋詞遊世品物以
一秋りや秋りそ

僻業物去秋りや秋りそと
いりと尋りあひく同いなる
あふつとこのあふれはる
あふつとこのあふれはる
あふつとこのあふれはる

すうりうーこのころは移りもつた
ひらて

日暮ちひらてとひらてとふらありは河
昔の人このみくららにや古今にお
なく見む後撰よもくあー今の世
の夜ふよむるをうすそをいま
あめりゆうー

一あつらふくり

寶貝治百首時中袖言為律舜録
中袖言被ん合之時あつらふくり

いしりーとあそふは平可軒酌之由
彼時之

一あつらふ

千みらさふとの合

た た

四そいあひんさ余彼ホたの影ららるる

た 由ち居

倦人の紅とさけと星月のあひるあつら
たたの陰くららるる月の月波ふ余彼
あつらふ事也たらの久しらのあつら

とくしくいゆふこと倦人の位といはせと
こころは昔長身の光者不そ終ゆり共
間將とたゆまらふこといふやとすやゆ
をや抱心治其の多ゆらるるあはの河治
為舊執事強不可庶未不な
也の持とすふゆららやぬ以中仕たゆら
八雲内物ちららるるあはとふふ万葉小新
世とつりそまふゆららとあはらり風情あ
くらららるるあはらり

くろく

千の百箇その合

た頁

顕昭

嗚ぬを尋てふまはるるあはのまかると花の情あは
判ちららけの河とらやせかくてことふ
あはれふららららららら

六百箇その合

た頁

有家朝臣

ゆりらとゆらむ程の情あはるるあはのまかると
判ちららけの河とらやせかくてことふ
ゆり但た中ららら字待ららとらら保河

ふまじと教ふいこゆてゆくわふや

玉葉集十六 希大細言為氏

六十のちり老なるものちりいそをまっ情の力ふ

三二のり

千あら書 寒蓮

曉の野立まててふりりふいふふりる宿の

京極判ちりふりりつる宿の平花

のふり方中麻わつ草の書あおりのふこ

ちりてことりりちりりやふんちりん

十のりす

順徳院の百首

秋風や地をふりてにやまをこたつるまを文城野の原

文城野原千草のたれあつり京氣又み

簾はくまもの洞に鳥を新あ旨い

續拾遺

為家

か松小結ふ詩の初おれまを神さるあけりり

貞康二年 為家

かり人此羽をらるまを白むれりりちりり

丹百番教合

定家

幸近小詠やうも物うい舟園と光のころ火の影
一月花と名のまことらむじ事

信吉の教合判き月花とこの事と
よむじ事いとことしやと結ちたる

一はくつふとつふの字

西行清尚蒙羅河より合

世とけことろろまを成かむき雲のあふはく念
判ちた方はははくことろろのあふはく念
はく地ろく人らむじ事ふにらあふはく念

祢ふくいさふにらうのあふはく念
とこの次小申おあり

一雲清抄云

我無として其ま清ふそのあふはく念
表ありとしてそのあふはく念
るる事とあふはく念
いさそとらむじことし事のらむじ事
中におあつつかとらむじ事
おあつつかとらむじ事
それいさそとらむじ事

又らとて物ありとておほいしき事なりとて
ひらき物傳へるおほいしき物なりとて
あそりり多るるるるるるるるるるるるる
甘ま物なりとてありとてありとてありとて
あゝあゝ又らとてありとてありとてありとて
あゝあゝ又らとてありとてありとてありとて
あゝあゝ又らとてありとてありとてありとて
あゝあゝ又らとてありとてありとてありとて
あゝあゝ又らとてありとてありとてありとて
あゝあゝ又らとてありとてありとてありとて
あゝあゝ又らとてありとてありとてありとて

松風を吹かすことありありとてありとて
匂いじき事にあそりりるるるるるるるる
あり後物物ありとてありとてありとてあり
中に傳へりりるるるるるるるるるるるる
ありあゝとてありとてありとてありとてあり
わをい傳へるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるる

千人百篇 保季朝長
宗元林を君らありありとてありとてあり
系極判云ふるるるるるるるるるるるるる

玉乃と柳

田行侍 雲雀川 夜合

いづのこゑもあそびしつゝあはれさういふさうあはれ柳
たふはらうことわりとるらうらうてあ
あゝさうあはれり末乃うてあはれさうの字や
もこころさういふことわりてあはれさう

一耳のいふことわり

中務卿 親王 文意 ころ首 目よ

あゝあはれにさういふさうあはれと川柳 涼しく
そゝ又らと川柳 或人の縁之付あはれさう

後志のいふことわり

常の物あり 福来う 柳てあはれさうのさうあはれさう

弟のいふことわり

ひらふのさうあはれさうのさうあはれさうのさうあはれさう

さういふことわり

荊やう守あつさうのさうあはれさうのさうあはれさう

い田方と 跡をさういふことわり

あはれさうのさうあはれさうのさうあはれさうのさうあはれさう
あはれさうのさうあはれさうのさうあはれさうのさうあはれさう

こゝろ首 柳とあはれ

みかぢのちまにこしはすもろもまのひまふ今ちぢ
ふの若やけりこすひまや

二海らの風やきたつ川後とまきふもまのちぢ
あのかまうらほのうらけりてはらまのあまのちぢ

ひらの浦の志かひのまはとまのちぢ
こよこ三首輝とまひ

あぢらもろそ心風まはけて冬雪とて廣く雪ま
あすこひやまをち焼て雪まを雨とて大東の里

こよこ二首輝とまひて死色ひ
ままを海の濱の残花ひまてこまはまのあま

是又あまの迷えり不明は將死色ひ

あまのこまの音のまはるまのあまのちぢ

はらまこよこ三首輝とまひ

あまのちぢ大長家四首ひ

あまのちぢのあまのちぢのあまのちぢ

あまのちぢのあまのちぢのあまのちぢ

あまのちぢのあまのちぢ

あまのちぢのあまのちぢ

あまのちぢのあまのちぢのあまのちぢ
あまのちぢのあまのちぢのあまのちぢ

井桂抄卷第四

同名ノ下

山

古今八

中細云行平

立列いふ此山乃家におろけり此の山なり
い名は美濃國岡崎と國美濃國
葉といふ不同岡崎と國三文字倍文
山也皆の松行平郷岡崎國司也任
付や泳し多しおろけり新古今
十續拾遺六十六新後撰三

乃而皆以主御言詠為本
りとせ山

拾遺十

徳宣朝長

いしり子を此山にまゝとて老るるを成るなり

丹波國也出羽國も同名子義十

光範三つし大常會三つ丹波也

とくし山

方八

密本三白皇

乃れとて此山小鳴鹿の取らるるに秘ふくしと

山城國淡路色也

方九類三

乃れとて新田の山多し

とろの峯大和國也小倉山不可混亂

神さし山一四巻山一杜

義忠朝長

乃れとて神さし山の標とすしとを新はあせり

高光卿

乃れとて山をふりけ神さし山の標とすしとをす

丹波國大常會神あり

忠奉

古今に
神ありとて室の山とけり神此とて

ふる人あつす

三田川紅系流神まひのりまの宗守あつす
大和國也神まひのりまの宗守あつす
不可得乱神まひのりまの宗守あつす
大和あり古今も

神毎月時あるまふあつすあつすあつす
是と大和とつり但古今も宗守あつす
はくしはつりまむとそまふりあつす
ゆまたつり神まひのりまの宗守あつす
まふりてとつり大和とつりあつす

の
のりまの宗守あつす
とつり

まふり

ひまのりまの宗守あつす
まふり

まふり
拾遺 十 伊勢

まふり
古今十三

まふり

古今十一

左原え方

吾羽山菅原小守つる逢坂の用にあつふまよとあ

續古今一

定家卿

吾羽川雪けの水とあつて用にあつふまよとあ

西坂中山階ふふ山城あり河と川とい

西も和歌を羽山に限山階

引一千里菅原一山一田井

後撰十八

讀人あつす

右小守、少一の里とふこと、和歌と糸いあありあり

後拾遺 十九

後繼朝臣

和歌菅原とつる今一り少一の里のたつとあ

山城國あり

古今十八

讀人あつす

ふつふいに我世にふるむし菅原や伏々の里はああ

後撰 十

菅原や伏々の里に泳ぎいあふはあとつた

大和國也

新古今

後成卿

少の山松の陰よりあつるあふは田原小松風をく

百葉

おろし入の懸言也いめ人の伏見の田井小原候に
伏見山ありての田井なる山城のようなり
まことに伏見の町人のまじりたる候伏見也
なりこりううそりこの候

古今

駿河ありては浦波といひあはれと云ふは
の目

駿河也

方系 十九

家持

田井の浦のそは台首者候と云ふゆえに
越中国布勢海也あはれ不可誤れ

先づ或教仙だこの浦の者候小原の
目ありしに教とてそを誂し
志と故て戸部新難ゆい

方系

すこはれたのまじりたる候に
あはれ

是に駿河國故

あはれなり候にたのあはれなり

まじりたる候

方系

分りのあはれなり
あはれ

方一

うのくふのたあちひちふこのあふみむら
大和國也

方四

ふそのあやわふじ秋はあにひひくもあふみむら

方七

秋はあにひひくもあふみむら
紀伊國也子細見萬葉集

方七

岩くれとのあたふ立海つちらふらふら

山城國也

はのほ一舟橋一中川一思

万葉三

くまのあひらふらふらふらふらふらふら

大和國也

方十四

とあはあのみりしうらあやふらふらふら

千載十四

源仲徳

しんあふししあ中川せふらふらふらふら
三和各別和歌萬葉小と野のさあ

くくしらぢりやー我まじりしこと
志すこととらりいふー因不飲

方三

朔風のまじりぬまじりのいとういひしる

紀伊國也

ま野ー浦ー入いー萩原

ー豊原ー濱名ー地

方三

ゆの浦のうとれつこは心あまやうと愛ふゆ

金三

後頼朝臣

勢さくゆのいはいの浦風おた浪うらたのさ

方三

どやまゆゆとらやんまのまはるはるい

大和國也

方三

らのくはま野のや原ととれ西新いでん

まの浦のうとれつこは心あまやうと愛ふゆ

又まの浦入いし進いまの、萩原い

大和まの、や原、陸奥也元年

宗近亭會小或仁まの、かやうと

方十四

年基法師

まらら山の中ふられていそむる此の里をさ川原小穂人
暖河國あり

都多山にむしりまや屋を築きすまに河原と若松
り縁

こころあり

川原一物原一山一杜

方二

川原のこのむしり山は推しこまのえんは境

古今の

遠人不知

習らして居るを思ひたり川原の物原に紅葉あり

拾遺

おれらる川原のこのむしり山は推しこまのえんは境

川原のこのむしり山は推しこまのえんは境

川原のこのむしり山は推しこまのえんは境

大和國なるはる

新古今三 業式部

川原のこのむしり山は推しこまのえんは境

川原のこのむしり山は推しこまのえんは境

川原のこのむしり山は推しこまのえんは境

川原のこのむしり山は推しこまのえんは境

領

續古史

終周

夏の日の氣小涼く思ふも秋を待たず

西行

ふろの行罷りてあむらひのさかひのさかひの
あまのついでと北風吹

あつらひ

格造ニ干

ち任卿

あつらひのさかひのさかひのさかひの

方七

あつらひのさかひのさかひのさかひの

あつらひのさかひのさかひのさかひの
あつらひのさかひのさかひの

方十

あつらひのさかひのさかひのさかひの
あつらひのさかひのさかひのさかひの
あつらひのさかひのさかひのさかひの

あつらひのさかひのさかひの

方

赤人

あつらひのさかひのさかひのさかひの
あつらひのさかひのさかひのさかひの

桂崎むつし此川の柳移家宗を墓に作る者
也

海きりあやとりの言を其の月とよふをはる
是し月ある也

大坂の松うらとりの言を其の月とよふをはる
是し伊勢國海多色也各別の事なれ
ことし山城の言とらてて人の不考
その事ゆへちとふ加書ふら
はるなりし一橋津也奥はにん

後西園寺

のちりるふかまは八幡のあまを此川やちの道の濱
是又如何

玉川聖田一野浜一黒井一

拾十

玉川はさすたのりまらふ昔此の言にやま
方葉小ば下句何そこのころあらり
のききとらり是し事義國あり

新古今

能因

夕まきこを風うてみら此聖田の玉川
千載也

後新古今

かまきといひ野添の玉川流きてしるる波も月夜り

後拾遺二

青草上

相模

みやをい波のきくみり流る卯花なる玉川の里

は三首玉川在而不同矣那知或云

淡奥或云橋津國也

千載二

後成卿

あさりてたみらむむ歎みの花の露を井を

は玉川い山城國也

續古今

後多相院の製

玉川の岸の山吹も多くとてしるる浪もかゝり也

あは切寺い野添玉川井も玉川は而歎

用は橋渡しまこれ一真本一

万四

ゆの浦のよとれつさう公ふよとやうまふしゆり

橋津國欽金葉續古今以下連

後拾遺

相模

あふてと物思か力とを成ふるゆのつさりもきて

是も同而欽ふ我後頼朝長まつ又

ゆのつさりしと詠と

万十四

あつとせしむる勢ふる志れり此の橋やゆき
古徳國也此橋代々集連綿なり

合二

頭仲の長

み月面小る海をりしと川を本此の橋うたぬ
大和國歟此橋其若相似不可混乱

大原一山一山一山一山

詞花

良暹

大原やゆき炭のゆきと祢我やとの方と然り
小山の大原あり

方

大原の城は山ありて我らうにいとふ事あり

古より枕小山大原にもありて書連なり

古今

業平

大原やゆき山ありて祢代のとて多しあり

いふに城國はまこととて是れあつて大原社の名也

後拾遺

良暹

やふてや月やうとて大原やゆきの志也地者なり

大原一山一山大原あり

合二葉六

大原やゆき山ありて大原やゆきの名也

あし也

小野一藤原一の母橋

今と美奈

云實御

雲此とてうひてさるるおれはとての室人各等
大原地つた小野也唯高のふはけり
てす海せぬひと源氏小うた承久
まして行り一とけい雨也松清ふと
この也深養長又う補施其寺と
小野也源養長又う行りゆふや梅
里とつふんらとさるやとおちせ

古今

浅茅生のとての藤原也とて人さるるやふと

後撰

源等

かきらふの小野は藤原也とて人さるるやふと
古教花ふと城園とてあゆしてゆり
大原小野とて同和とおちるあや

續古今

藻壁門院少将

露志もたふと志の原ふと又ゆて接の神を付
續拾遺

定尊律所

接人の者りり私神とて夕親むとふ小野は藤原

是等部地は小野と云わしぬ程あり近江
小野と云ふ所あり藤原と云ふ所あり
是等東海あり藤原と云ふ所可相叶ふ
但不字元達説推量ありなり
といはくは小野と讀む所あり
なり—真言小野と讀む所あり山階の
小野也小野古に侍勢あり
詞花 後雅也
夕旁に之の舟橋言す是の所の所の
其國不明

玉に三鴻に—

後拾

重之

夏りの玉にのまきと云ふ所あり
古より松小越希國と云ふ所あり

方七

みまの玉にのまきと云ふ所あり
松津と云ふ所あり定川也
志のふりかともむし人ともありし
みけのえ—吉野
後撰 十の
漢人ともあり

今昔うつじらうの山に於て山と云ふも其母は
近の國也人常會らる也後拾遺あり
おちろの入る

方九

おほくまのりゆをくまの人の杖の田圃なり
山城國宇治川也俗におろくとも云ふ也

相山

後拾遺八 定頼卿

相山の松浦風吹くをらうして志の志と云ふ
漢波國

後撰十一

贈大政大臣

松宗つらきつら波にえことと云ふなり

隆興未相山也

おちろま 岸 備前國也

おちろま 岸 備前國也
はくしゆいふおちろ 由治るる 氣を志と云ふ

是備前國あり

方二

いづれつらそなりともやゆともうと云ふなり
園を明るり

おち津嶋山 おちろの濱

仲津浦の成の玉と塩をらてかくらむおやん
紀伊國とつり

比方の海おとる海山をまて我ついに急の海
國をぬる

おとりののし海和泉國あり

古今十七 志次

若しおしおとりの濱小海りの島をまて
新古今 定家

とよしおし仲津の濱をまてお

和泉國あり

三津ー淡村ー淡

古今十七

ととるや難波のつる小焼塩のつる我老とる

百十一

白めろつれおのちていそのつを我急とる

方

おとりのみじといつらつひよしてつる月よに

方八短長

難波つとるのちおとる大お保とすつら志けお

後撰十七

近江津と云ふ所の浦にふたつありて其の浦に
と橋津國也

古今廿 史記

と云ふ所の浦の浦にありて其の浦にふたつありて
陸奥也

舟の浦

五十

いふと見ると云ふ所の浦にありて其の浦にふたつありて

橋津

續拾

近江部成員

近江守の浦の浦にありて其の浦にふたつありて

近江國坂本の浦にありて其の浦にふたつありて

舟の浦

新勅撰の 續倉右大臣

舟の浦にありて其の浦にふたつありて

金葉ハ 紀伊

素直の浦にありて其の浦にふたつありて

舟の浦にありて其の浦にふたつありて

舟の浦にありて其の浦にふたつありて

古の松和泉國と云ふ

おのの海一濱

方七

明の海は約なれ余波多しか成の浦生に執てん

越中一國也

方

行者のふれ濱多しよ約しておのういさくつての志世

栢津國也

おののうらみ おくれうら

方

おのの海のちりとのうらさういおのひやゆえん

右門部主任おのさうり部由姫子

也未有米討既絶往未里月之後更

起屯心仍作はら贈妓娘子之仍

はらみおのし國也

新古今十白 定家朝臣

君みつたつたのちこれ海小塩のすけふういさ

あおの海同和たのちのう後祿た又

奥海陸奥也

續古今

順徳院法親家

うらさういさといはけくおの海の物の居るは

い國又不實

拾十八

おの浦のあまのりすくわさくこつらつとせすま塩みん

右なる松小伊勢國とそりおの浦田代

おの浦一河原一海

百十八

福丸

とらふと我らりおの浦のまきせりり金運

越中國也布施海

古今

伊勢

おの浦のあまのりすくわさくこつらつとせすま塩みん

伊勢國也

百八

聖武天皇御製

おの浦のあまのりすくわさくこつらつとせすま塩みん

をい國也

百十一

おの浦のあまのりすくわさくこつらつとせすま塩みん

下野國 但方三

おの浦のあまのりすくわさくこつらつとせすま塩みん

こつらつとせすま塩みん

おの浦のあまのりすくわさくこつらつとせすま塩みん

あ

古今九

色捕弭

夕月おおやけのこゝろにまをさすてはくはくは
但るのゆへにまをさすてはくはくは
浦小こまをさすてはくはくは

全八

大中長捕証

むくしを二見の浦の目あきまをさすてはくはくは
河よせのふくはくはくはくはくはくはくは

新勅 十三

家衛弭

我急あまをさすてはくはくはくはくはくはくは
尾張國とつり

あまの浦 一 浦 一 の後 一 山 一 の山

方

ちり削白皇子

夕まをさすてはくはくはくはくはくはくは

橋津也

百十四

あまの浦のむくはくはくはくはくはくは

國不ふゆ

古今十四

そらのあまをさすてはくはくはくはくはくは

百十一

采女

浅香山麓をへる所の力持たれたる我々の

まゝ陸奥也

方、

市原王

町にてある時海軍をやりてある所の山に

尾張國とつゞて

かゝる山一丈

古今十々

中

かゝる山に立寄りてある所の山に

近江國也

百三

かゝる國の後の山に立寄りてある所の山に

豊前國也不吉而也不可誅之は

いそちりぬ

續拾

僧正際年

神世よりえとある所の山に

伊勢あり

かゝる橋一濱一山一丈

古今十々

漢人あり

かゝる山に此橋の

新古今

妻の足がりの浦小舟をうけてつきの橋と云ふ
方六 短評

海と云ふと云ふの文小舟を記しし

橋 續文皆橋津同和あり

後撰 十七

世中といふそのいふのうたをうたふれしあそ

拾十 能宣和長

市浪のふれしあそくてこの思ふ人々もあつ

近江也

今まの浦一野

今まの浦一野の浦一野 まづ

新勅十一 行能和長

殺さぬと云ふはさしなく我れ記をたおしあり

橋津也伊豆の国者

後拾一 名新集

今まの浦の國をわする世の秘の秘のあそび

是橋津也今まとい別あり

續後撰十八 好古 小舟也

浪のふれしあそびのうたをいひあそび

橋津也 他人今まとい別あり

やうぢのころとよひにまふみしるふくぬ障か月夜
越中國也 百十七

みまのつとまふつふあふの山飛きてあふれ
とらまふ大和の國少やとおやむまむ
あふふのあふふ山ふらふ子ふしとふはしあふま
とらふりこまふあふふ山と越中こまをわさむとま
あふてゆし

明 後撰 十六

長結

東海のあふれあふてふてあふてあふのたふふ
近の國也ふ新勅撰きと向ふとむむ

基後

ふあのみらの志のあふまふふふやふ枯ふあふ
大和國也

あふあ田のむし一平路一海山

方 十 四

やうこしてあふ田のむしあふふのむしあふあふ
方三古ら松不は國
あふはへむむしあふあふあふのあふあふあふ

國を愛つるまこと任者のりつやまこと曰和
小いりくやうとん

續古十

為忠卿

あつみのいづこひうてたそまあかこころの月のまは
大和國

みづ川ーの里ーの山ーまーー写

まらぶの長

ろく川子一のれの信をしゆる此例をふふあ
金

こころいれろく川子の月とておのひあつるこころのま

の里田和山城國也

新勅七

進之房卿

ふすの月のろく山をこころのりらにあひふくろが
丹波國大常會とつ也

古今十ろくま

秋夕と月いろぬるやあつ光とれ地すまの

是山城上桂川色也今と桂文院

とやあつ

後九條内大臣

まはあのおやらの月のろくこころ山まてつこ海
の中を

二七二 執事也

二七三 田一の浦一山松

二七四 詞三

好忠

二七五 山松の浦一の浦一山松
國分也

二七六 方 十二

二七七 國不審も作勢こし山浦
方 十四

二七八 山松の浦一山松の浦一山松

二七九 山城多羽也

二八〇 山一岸一山

二八一 方七

二八二 我々の山一山松の浦一山松
拾七

二八三 山松の浦一山松の浦一山松

二八四 山松の浦一山松

二八五 方 十三

大儀冠

二八六 山松の浦一山松の浦一山松
山城國也

ひまじまの杜からいさの杜

方二

人丸

ひまじまの杜にえいせいといふところの杜をいふ

續古今又

夜山

村の西にいふところをいふ海の家をいふ杜の宗

とて小紀伊國也とも同而んふたさとも

院橋津まゝ人の名也

まのりち山

方九

ひまじまの杜にまのりち山にまのりち山にまのりち山

大和國也

方十

并基法師

ひまじまの杜にまのりち山の南田川原に杜と稱

駿河國也同又

百十一

ひまじまの杜にまのりち山の南田川原に杜と稱

ひまじまの杜にまのりち山の南田川原に杜と稱

後撰六

貫之

ひまじまの杜にまのりち山の南田川原に杜と稱

古乾常陸國也

續古今七

西行

神風ふりやまきくをゆきはる橋のまのこたのゆり
伊勢國あり

明しゆ

方十五

人丸

玉と菊とゆりてそそ夏まはゆりゆに毎夜
千載 後頼朝臣

塩たておゆりゆのさゆり宗浪こす風のふり

淡路道にちる説也いとのこぬ道に吹

千十八

頭捕郎

あつらのやゆりゆの浪風小我のゆり妹のゆり
いとのね淡路に

しゆ

方葉

そるまきしゆゆの神がこくぬりゆりゆ

伊勢國にこぬ又淡奥とて

後拾樵

松崎やとゆりゆ成小ゆりまきゆりゆ
淡奥國也但松崎伊勢國とて説

しゆ

百八

金村

波乃りり入中うこし海の濱びよあさりよつり
列

備前也

古今二

今とくし美白ふらん橋のついでついでのた

心城也

のをせ川也の川のつららのよれつ

方三

は波やうさうし比るうのをせ川もれえやけ
近也

同十二

いさるのよせの川は後ふらんふよれつ

河内

同十

のよ川のよせをいさるふらんふよれつ

大和

同十七

いさるそのよれつ山をいさるふらんふよれつ
能登

井挂抄巻第廿五

同類事

六百番教合

右

中宮権太史

すの海の歌はどのうらもいねむ風ふりてこふり
左方より右なる場は院なる首頭仲野と
すの海の歌はどのうらもいねむ風ふりてこふり
と三方を相遠くとす詠之を越え又曰
判ら右のまゝの海のこと左方より其とも
ぬ宛百首之内北殊を改述者附去取事

同平合

より草

左括

題昭

あまのまじりて縄なる約とみあるたのじしん
右方より左なる河に集後惠なる云
ゆゑに兼角をわらふゆゑにまゝの約は
其のつらむしとよ縄なると少あり
そまじりてに立やうあり
判らたのうの後あは法師なるふねの申
右方より左なるやうのつらむしと少あり
但平定文のうら小拾遺にいひらる

まめのつひひりすらそまゝつとて
 誦せり女よらりて若くもとらる世に
 偏徳と断つらなれらるるや

同言合

た

女房

女房の紐子と書やとらるる女の徳の正しき

た方やと書改つる

女とやと書とらるる女と書あつて紐子也

とらるる女とらる

女房と書不入撰集者不見及み此所

判らた方類改つる系は誠不可辟教事
 也撰集之方と書改つる不可引也

女房百番教合

た

顯昭

東詠と書ふ書もて女房を改つる女房詠系
 判らた方詠と書改つる女房詠系
 とらるる女房と書とらるる女房詠系
 二年た女房詠系百首よ
 是る此開詠系と書改つる女房詠系

正治二年田村長家との合小

約を打むの儀をなむをむむ日にとくある備
治似昨今事餘達遊迹之轉亦むて

見わらすの河東海峽をむむの取相目
西首を欽た身取与執御を珍瓦

神以幹る心私云二判一唯欽

六百番 振急

大持

頭照

判云たを始終りくくして見くは
判云たを始終りくくして見くは

基後とपीーウウ人のいせの濱
おてとひりうと土代とせうく
見くゆん

同合

右

寐蓮

判云たは後二系殿女房の執事
すくくとももつ也子裁集又入也
裏はくはふりつ法一ッ
そ急のきつ入りくろ文字の

いづちとこつすゆかし

△同も余於葉のりまうこつす事
千みちあま身合

忠良卿

園地^いれ^は甚^はる^の里^し白^は美^をて^はら^はる^はい

京^に判^まと^下れ^句の^小の^字も

あ^まい^しり^ぶふ^まや^字え^ゆや

中務卿^親王^四三^の云

白^のの^りる^れま^にお^ふり^月の^あひ^ひと

民^に小^のま^りま^う指^合付^え小^町に

花^のの^こら^りは^りれ^らる^はり^も我^力世^小の^あら^はる^も
是^い秀^逸久^い何^事歟

△初大文字事

六百番三の合

定家朝臣

う^には^後に^治の^美れ^存よ^あり^けと^はい^ひは^らる^はい^はる^は

判^ま初^小う^はら^はる^はと^とろ^ろの^地事^書

と^小の^まり^とゆ^る人^の合^よの^威言^る

や^りま^やゆ^るん

家成卿^大三^の合

初つらまは川のあふはるををうあつらま
基後判云初つらまの向れふま
あつらまはとそまはとそまはと
あつらまはとそまはとそまはと
あつらまはとそまはとそまはと

因行清堂羅川云の合

た貞

あつらまはとそまはとそまはと
判云あつらまのあつらまはと
あつらまはとそまはとそまはと

た

あつらまはとそまはとそまはと
あつらまはとそまはとそまはと

右

あつらまはとそまはとそまはと
判云たのりあつらまの中れふま
あつらまはとそまはとそまはと

井佐抄卷第六

為世親 附談

好宗近初治中云續古今心云云
西園寺の一切律儀供養の時民部卿入在
可撰進之中也亦小初作下也其後
初加撰者結句真觀下向開東將軍
宗親王後 家中務卿 道師範とありて
每事用東より初とて我心も
小中とありたり民部卿入るに我撰進
の云の云ふ事也中細河又々寸

とていふに同傳りてし和哥評定時
治定事と後又中政のやうに
評定よ治定志傳し小何極事不
之申初りしにいふ何とに
為内府九条内府 基孝卿初系申初傳り
去歌也卷志あり仙人のたまひ
幣り小つらふ小物と肩あつたそと氏奉
入道利口してやうとて集
治定後市たお遠事とて一巻書て
常盤井入道相國のものといはるる

通延慶辨陳内勅撰者おのり二百餘ヶ
系秘書と祖又入道為家より相傳の
りといふるいふ事也為教卿常盤井
相國小江道之間見及歌詞書小首
と傳ると百首身ふといひていふと
祈のちとていふる旨い事とあり
何秘書にしていひつらんしとていふ
片部被中云寛元五帖人といふ大略能
語只詞也民部卿入る毎と能語祈お
て常盤井入る相國の京極中物云

入る被中ノ夙ノ不ノ異ノとして志ヲ一ニいハ不レ被
請マ六ハ恬ノ身ヲ祈ム諸人三ハありて誓言
損テゆリ々々あり

一系法平ラ常ニ盤井入ル相團故京極極
中細云逝去結て後入る民部知人の心と
はの心を杖小びの眼年之て悲歎則休
就中寛見え上の恬を信ふ逝く續き今新新
撰者之身亦送被中事殊一ツつとて也
カ世界私事也也ノ撰者其故初為家家
ノ故之不逝之後成幽玄にて則及定家義我理

よくて新字をくく民部知人入る祈と可
字之由源相有也也

又云民部知人入道祈中々々とて又云殊殊
勝ふ事ともと教見あるはんあ孫んとり不
撰入もいり一らんとおり一つらいおりつ
おもいつていつていつとある人子孫の撰也也
又云二系た法の總教定じ道門中ありあり
一ノ不縁者為氏聲も成て細々會合とささ
らつ時酒宴の報談不教定知中納云

入る殿の詠一

長月の月のとこの時を山あきの御家のとくまに
とこの詠深公所討深小覚い由歌りし可
禪門益と持とくろと打玉てと氣のいあ
志く成て是の何の面白いやらんと歌り
多れさもこととていさふくすくくうら歌
むの事ととやうしやうささしとれ白地
あゝうらうに歌作を中ニ忘事也是して
百番の号合少と書入て久と風神
不可然勅撰ふとふ可入三のふらと

うらうらうふりゆり小是と
初稿美之系不似其意とけらいま
玉葉小撰入不思代事也
河部ととついんあじん言可其林
中袖云入道以法院内裏の會行踏柳一
るのふ聖系後名羽院の柳りさうてと歌只いの焼くや
と歌を伝枝一座仙洞の後せられて故定
家卿可停出仕と由歌作之旨歌り
禁裏御日教後出仕ゆらさきてして後討
文書とてその事ゆげゆゆ法と意味

巻序

之中殊自屯と。先達の後學可
知者也

又云中納言入道のつらとて後鳥
羽院の後のけとての又納
四後時深のありのとての感ありの
とての思のと見ゆの
とての事あり

又云中納言入道慈鎮和尚又進とは
小我のの事と書小あり法師の備
中身一平人のとてのとての

或人語云西行自教と書ての定家卿
の年比判とていなりの後西行のとて
つりの状小納言の判のとて出来て
是とての人すのあふのとて

後鳥羽院をのり九条内大臣の権
被書勅書と見ゆの後事能の能の昔古
とての法性寺の用白首の院勝寺の額と書老
後門のとての赤面のとての
妙喜院入の仁平の賀の羽比のとての

初申ルルにね二位のころよひのむふく此ころ
かといふふふふふ

言所の免との麻のさるるりそめわねの香あきか
とよふふふふふふふふふふふ

ておといふふふふふふふふふふふ
くわえふふふふふふふふ

或人云新勅撰えふふふふふ河梅のふ
花やわらわらふふふふふふ撰者周章世

々りねと女生二品の中ふふふふふふと
撰んふふふふふふ

月影いふ里のふふふ白ふ人梅のふふのふふ
とふふふと見おてね入ふ

ね宗近語云て又那の
人うらふとやふふふふふふのふふの曙

のふの建長詩身合付りや紙のふそふ
のふふ書て祖父入るふふふふふ

何見のふとやふふふと撰書ふふふと
えふとやふふふふふふふふふふ

ねふふふふふふふふふふふふふ
被出とふふ

小倉苗門信名云推禪門云後漢祇院氏部
邦入道は被仰々々為氏邦をんを
とやう人玉津嶋神々の山ぶくはあ
そまふ人曰そこふ是程のち考逸い
つまじりつと被作下云

戸部云白河殿七百首の時氏部邦
入るは制衣の教と見合て八十首泳
泉大御云わ氏に飛ちのおちく信と禪
門ゆつたて首首と候と遷四之時を者
とこそ見つとと並小勅定ありり

又云後七首討まの歌まうりて経冊
泉のあのお入風ふ入らまてのこ布の
を少てをらあまてらんくううう
ぬい事む可も用意云

祝部乃氏神云少年時祝部忠成勅
撰作小あひてゆりこ孝子あと見て三のよ
みゆーくくつ教い書おしふむひて案
せよ今より少のふくうりていふゆり
こいよりまよ成まうとやい
於宗道云氏部邦入るは信實の旨

といふ事双立の讀よおとしし事いふり
續後河巻頭よ入として三三三のう十首
しりり書ておくんとつひつひと書てつこ
是の何の用ふり以後とて書てつこ
こもも早下の谷と出言ありこも百首
と續て民部卿入る院とこひそり
その中一

おころせのの音くふとら哥の法師の
やうるや作らんと詞と付てつひと書て
其日お入て中院へ尋るこもつり對

面志してとくし何事にいりゆ度そと物見け
まにまに法師のやうるつとあは事り
面白く系ていとと教おの初やいりこ
飛入る書いり續後撰の類と云物と云
年見ゆふ成氏つあつまらるりて

まそそ守おにいりり氣そと神と操女の本やあ
と云その詞ふ海もあもいとあまきいりそ
らくそ其時後のこおもこら一の情と一の
事あつ蚊帳中てこあまいあふりや事
のりつそとつなり滅ふ兵地成門中り

澄信と定家と一脈の兄弟也と傳は
しるふ。淺くもわが爲に才歟

信實の長女三人あり。ふふと其のよ
深壁門院のおいとしふ。秀逸あり

よの書ふつて其列のあまふ。不
と云ふ。感志して京極茨門老後。小古を

と書して。いりらる。奥書。小國母仙院
おの殿依爲はる。之堪能。不顧老眼之

不堪。書之。寫。い。おの肉侍。い。ま。い。い。せ。て
あ人。い。お。い。り。深壁門院。おの。老。後

小出家志して。法性寺舊稱。よ。い。ら。り。以
平親清女。あつ。ま。い。り。の。あ。り。て。さ。は。る。若

誉人。ふ。お。い。ら。ん。系。を。ん。と。て。法性寺。家。和
い。ま。り。ら。り。持佛堂。小。入。て。障子。う。い。ふ

る。やう。ふ。葉。は。い。す。ち。ふ。ふ。い。せ。お。田。お。い
ける。の。田。お。い。と。い。ふ。而。白。い。て。老。の。寸。さ

と。い。し。ん。て。ま。い。い。せ。友。い。て。と。い。と。の。若
の。お。と。り。す。い。し。ま。い。い。せ。い。と。て。家。あ。い。ん

い。あ。い。ら。い。あ。そ。と。い。ら。い。せ。い。ら。い。わ。い。い。く
優。小。い。を。傳。は。し。わ。中。つ。と。あ。と。常。い。と。い

やろやうに可讀たつと右つとあらぬ
やうふまゝあやくまゝ入る世のまゝにいよ
じをくも

又被申志塔とくむやうにふむ塔
とどくりくむじとあ地盤より
くらあくらゆ板よりくり讀とこ
今出川院近衛局御書云大納言
子こと小言とらぬせいに伴新野老
と人まゝ伊僧心ふとあてあふまこ
我由い九小成し一付地の海と云是と

案と見をのふとんまといふかうすゆとよ
みてゆし福ふおあしあふとあひし
と思て他のけのあつゆとよまゝくしを
大納言真入てけあつゆのふつとより
じよりいふと始終ふつ讀成るしと
中々事し一續古今よりけくふとて
あ代の勅撰小あしてふつ教とらまこ入て
ゆふ文の詞のまゝゆりてゆとくくま
詩ふととつかりてふ作集ふ入佛法
少しし比入て一生不犯の福也法花

くら小和尙とくくはそとひはあつり世
み小成ゆりやうくまじうまうし是北の
ゆつこ年にしてゆくとあつりまうし
の誓古とぬくつりてのうへの事也と
おぢせくれくら由教判ぶらりてお家と
あひうまうりてまらふ日十首とつよ
まきくら後をつりて又小見せやま
いんまま十首とんてままあつりや
ふつてまはる官とらうおぢせくれと
らして後壬生二位よかんまうしゆおぢ
所まくらつらふふの事とて又社の
とまうすくことつらまうし事慈徳和尙
の恩徳也

法大寺小法の間とらわあり和殿の
の間也實定後法大寺た府ありの對面
まうしくらも也

一系法下また大將家六百番教合の時友
右の人教日にし系して加評定てた大
洞と被書くらり自余人教不系の日あ
まかせ定蓮頭照毎日系てつさくくらり

頭昭いひありて獨古を執りり定蓮
らゆらしむとていさうひたり殿中の
女之居例のころゆらむと若村されたりと
源を居ちぬ大臣通光孫孫也
平桑内府被執云後鳥羽院の時村平栗
の女とてとつ押中ふのつひの哥是と
まのいと若村栗の女にねる是とまのいと
有のふ後京極殿慈徳和尚已下其時秀
逸より人也無の光親御宗行御泰多法
眼多也入り無宗殿和云雨に庭とてそ
そつ座あり庭小大よりねる風吹て珠

面白く日よりのついでり慈徳和尚
つらつらといふ中にもふや庭の概
とまのついでてまのまのつは宗の御
あつらひのついでり御宗の概
とまのついでり御宗の概
まのついでり御宗の概
わらわらせぬいなり
水無宗殿の堂長老とて無宗三宗
の親とて語云けおりの朝のねと皇
中いよつとせぬま也けり此由の後の

おふと一付會一とて田のりくら心
しりつたそとと志ういふら想ふとせむら
いはるとおもて後やとなく想うまじら
月部らまき中十首田の合家隆弼休
ふちんじやるまじ白鳥のまどおひら枝葉
とまるとい京想福門のりまじま入る
の又やんじこのり野の欄りふおとら
おれつふと又やんじとて又やんはら
不足らまき物とて
又云秀能は後鳥羽院敷通ふいふ奴の哥

讀とおひりしりつらり中細云入る定家河不
被思食らるやとて一飛龍卿やとと
下のりらふいあすすと被りり
又云新古今に又秀宗力ゆりて後
岩の風懐舊とらりらとて秀能の被
入らり先秀康のまじわとの西国ら
くい首とてとも祇らつしとてうら
ーりりり

丹波内府被記とての讀よみふ常に好
詞も後久我相國いふ小やとてとて身

一の句にしてと申三の句にしてとこのみ
よまうとくわり後多羽院勅定は例通
光のやと信事あるなり午の書三の合
の時百首よは相國被り行て鶴
信太と白皇仙洞とを平と平出小書
とてみふその儀よとく其後儀
あり共は一度あり

武部云大嘗會日この仁安六条院
踐祚時大ま入る儀之負應後堀河
院四時被作京極中細云里中細

仁安と北加例之と現仁を歸ふとを誅
儒者あり諸大夫ふと此家よりあはる
誅來也可奉申其仁之由而周寺
被り之間家隆知家等可為其仁歎之
中申之是皆諸大夫家より出る
ゆへあり

又云知家卿又顯家北堪能はる事
陪殿弱京極中細云元之詔誅之
後家親と又より不交中細云合
其家親りやうありそととへて

座をて黙然量しりとしてとの合ふと
少くも毎度梅美之新初撰をの教ふと
と被賞祝老後中そを由家門に才にて
仰一の中細云入る逝去後向肖の心出
て賢治の百首を北由家風新事
そしちありく、らありり不知息事也
文保大嘗會哥隱教那祿之内同也
而戸部ふ被見新野とよあり、三つふ
露のりきこと云詞ありらんこの字懸な
又いしむしりのりりふらりりりと本の

葉のつれなきを我志のよこといしむの杜
比事日本記は神あまこく葉木あり物
ふとみり此吉事君世といしむと
と必梅美いことさめううー山也いし
いするんとよめらごうむはつ世ふと被
りいーとやうてゆ不實ありては若
小四尋ありりーふ大嘗會三つは那
いつまの戈まうそて新りいやんとつふ
やとこいりまて自應大嘗會中
細云入道死録知家吹拳をの

斗筭等と云うて被進き
ついでに杜日天破る也其れ其れ
被死平

爾伽井之文四地終云涼山月知家郷
昔思ふる所北山の樹に於て小曉をく此月
穀感甚何りも徳行干と被任く
可然物何りとして厚紙と十帖下
しるり何りも被任者四幣中不可進と申
感云

小倉黄禪云隆時郷行家郷小倉監小倉
て世少と申すり誠小倉を治り多
龜山院四村山城國名不と賤とる百額四連
被任小倉のつひのやけり一死者不と
すとして今に信ふつひのやけりす
宮の文に原ふとやうの若くとも
とらこつりし何為氏郷
望りーのんやうとらこつりし
そりし穀感とつり諸人志の特小倉
てつりこ隆時郷とらこつりの相對少と

こゝに於て一々いそぐり勅定小僧坊
付ふとちちせ事付るれい

はくすすすいふるそそそまじし
と付くよりしとすありとふいさささ

基任之中院禪門小僧冬冬等の時小社

まその社の名を賤志て連教付に冷泉
悪相中相殿と云と賤志て

其のたうーやうとのふふあくふ

と付くまうらとほ座感歎云極さう又祥
門柳と云うふ

老松比のうらたま云うふと云うを付

野もつそりーやうとふふと地

ろふあ白りーと観道基任其席

ふらて活ゆい

教宗通云民部卿入るりまうい

吾の今小人のりり小連教教句

二三ありて何人何木何形何の常

の賤物よりて用云する也ふと案

を今この末極は俄小連教もんさ

云事あらふそらふ小教句と安

人ふまういまふとすんかすと縛やま
又云民部卿入る真観のまや人の
薩麻の通門ふとよりつてくんとおとす
とて常中はわらうと進徳の

或人物語云中院禪禪門とら佛之房
わらうふまはわらうりて縁ふて
こはらりてらりあやうしとらなて
らくんとせられくるとら佛之房障子はり
とら入てらり障子とくく一巻はて
一首あそりくくらなはつんとやと進

あまのたのしみ

あまのたのしみは花のよきあはれや
こころのたのしみはあはれはて入るこころ
こころのたのしみはあはれはて入るこころ
法眼の悦とてりりい

叔宗直云民部卿入る為教と車れあは
のちてさくくり冷泉宮家はあはれ
小為教先のりいあはれ事とがさ
くり禪門はくくくくくくくくくく
るふあしこり車のととんて

を牛に引し車とてそとに申ふくらく
と連教とてしんくらくと為教しりす
業しんくらくはかふ付所のりくらく
て車しんくらくとてはかふ
えつちぬふ兄の殿とてしんくらく
しんくらく

又云後漢院の幸の并内侍女
と連教とてしんくらくはかふ付
為氏殿とてしんくらくのりくらく
志小十してしんくらくのりくらく

栲の枝とてたふふとてしんくらくと
きくらくとてしんくらくとてしんくらく
小連教とてしんくらくとてしんくらく
志く波の立しりて栲とてしんくらく
地しんくらくとてしんくらく

とてしんくらくとてしんくらく
かりしんくらくとてしんくらく
同院内侍吉田泉殿とてしんくらく
女房并内侍女お田女とてしんくらく
小十とてしんくらく民部卿とてしんくらく
女房の并

忠慮のこゝろに福休せられくろく身おぢらば
厨ののこきふまうたきこりて中つちまきり
くろく福よの連被りと思はれりくろくよの教
少将山よりいふことわりて厨のおほくろくに
あきれてゆくとまきこりの書とときこりて
成ふくろく其後四連被りあつてゆくとま
弁内傳日記よ書てゆくとま

六条因府被指云々龜山院四寸三式集
作者と賤物とて四連被りゆくとま
宗通ふら傳てははをせとせられくろくと

ゆくとまに資平卿と我力と福休あて書写
ゆくとまに源南純と為意卿とてあま
南純とてゆくとまとゆくとま宗通^{為世}南純
ゆくとま定家卿自筆本ゆくとま被
ゆくとまとゆくとま常純之由ゆくとま時
勅定不忘古今本と可被見由被ゆくとま
ゆくとまゆくとまゆくとまて備穀後南純
系女子細定家卿^{自筆}貞應本傳千嫡
孫可為将来流本之由加奥書本也
為意卿同口事ゆくとまゆくとま

りー 洛りー ちい

小倉云文永龜山殿百首三句合近山殿
重云宴ありこ大殿執柄太長ありこ
被多こ其河山紅葉愚味小

おのき林の嵐の山若小こくわこ木おのきふ
と海しり志と舞三四舞吟も穀感三氣
山階た府中座小かりて向山前揮志
案ま佳例天々氣依も石多盛哥被
付勝字平此哥了可り法勝字之
りーやうふんこ同り之をりー

貞観ち中細言眞侍相哥

小倉山今一友と河面さの幸約ま此ちゆえん
いま一友の四幸まこるえの雄踏と難被弄
換之上紅葉小ちりおとこと休と古方
合小多心方難仍難勝之中被中仍被
宣持貞観引級和哥業義勢係あ
吾人也

又云連被小本被と三句小わこる
つらありり有ゆ法頌をよこ
事にいりこりや後漢誠院河

四連教ありや志記と云ふよ
わらわと云ふくふの日記とらまじり
とふ田制敷付て後附句ふて連教付
てて程少る間難句とて及遠
礼ば句可也給之る勅定志承民部
卿入るる事と可為極民四斗之重
やう事と云ふ方氏卿何業々る事と
てとて被りくわるととるはなひへ
難覚るる事と云ふととて被り
くわると云ふ事と云ふ事と

わらわと云ふくふ二村のふと被り
穀感彰也湯座感致一と云ふ
被三句致
平中細云雅情云園光院殿信云
法石と云ふと云ふと云ふと云ふ
あすすと云ふと云ふと云ふと云ふ
目の事と和哥の事とありと云ふ
我力降不推考はる於和と云ふ人者
信
又云伏見院後伏見院被り

日向後勅撰ありて永福門院と尊
司前用白とよ可被り合ふは糸
後照念院殿よりふ四物終りし事
伏見九院田制教と後照念院殿より
と西風祈各別也而るやうに信とら
まきつら事究見よつらりあまこい
意の通よつら事面白事也
或人云時代不同三の合ふ定家卿
被合え良親王可え良親王と事
らつらのおりつら事こつら事志りつら

利口被りつらり家隆卿ふ可小所し番
ゆつら事定家相よつらけらまはるつら
り也但後を羽院帝に信よえ良
親王は勝の哥つら也と信あり
四意よわつら事相よつらおあり
まはりつらりふつらを被ら合よ信卿
不^{被入}秀^{被入}逸二首ふつら教とま長生
寛弘はつらりこの月日とつらつら
こを信つらりふつらつら合ふつら
の事し三首ふつらつら後代不實也

いぬ程ふありしす見はよきとてまよ
せし中の状ときつすぬ事中に庚申
いししといま今いししと云ひあひつて
ありありと案ありていふ此の
所ては庚申と云ふにげん用やと云
ふいとてげん所の時勝成事と云ふ書
てげん事禁裏の事いしに不及此の
所詩の由ゆはしりとのみ点まの世
ふいし心不心候なる四事にしていし
今いしと下改の語はいしし私の若郎

二郎ふととりあつるひあくはる
と云ふ書とていしと見ゆさ

戸部云此の文文学と人との首録
て京極祿門と云ふ持来皆其の珍重
なり佛法練行の通和哥致之申死
録被書哉

却賀貞尾明恵上人は乃教書の
異干他仍新勅撰少と云りあまの
被撰入又自老の集と云集と書て
教とありつるいしと人教書の被撰

文
教

是らいつせおぼえて入て對面して年々
うちやそとゆらり化て見え集ふ入そと
化つらふお尋ねらるゝいひゆると鶴ふ
物終て北河ふと聲は應して次お
又さたふとすそそとるゝさささるゝ才子
まよとて奉^奉法つるふ毎為ふ入りわら
らるゝいひそと人いけらと西行ふ見
あつて頭ららわらんふと出らるゝ
化しふとふ^困ふお物終化法つる事日
しらの作にいそらつひしていと^尸ふら

何らふらひらの法師のまやあまの文学
小うこまんとららものうらやうの文学と
いそらうそんとららと^尸さうせららと
或人云千載集は西行東園ふあ物
の勅撰ふとゆてとと志志くらふふをそ
登蓮ふりあひよりら^{勅撰}事るくらふ
とや被^{勅撰}あて西行とわか入らりと
いひら^{勅撰}立^{勅撰}作の林のうら書と云らや入
らると向^{勅撰}くれ^{勅撰}え^{勅撰}し^{勅撰}ら^{勅撰}し^{勅撰}とあ
はれそとてああ^{勅撰}とてそとら

又東國へ下るるとき

或聖西國しりのありくらくく仁者まはり
て通ぬまてゆるくく爰小田社の兼小
僧信男女遠庵まよりあつまりきり
むくまことへとおひりた人ともくく
祈り志つくくまて思ふ衣僧一人系
と四殿の因りへらまて後のころたひ
くくまて

ひるた力ふと衣のたの鳴立の林のの書
と云ふことと傳せられくくるとんゆるく

まのくくくくく

仁者神と玉國冬と身了の快おやくの南社
の春の属とふのくり和泉書の道徳の鬼神
形のしての紙第のとのたてのつのくのつのわのの
角ののの壇のの上のふのあのむのじのふの座の志のての人のふのふ
えのくのくのとのやのはのくのくのくのりのとのとの

國助神とまのとの神の護の寺のののふの社と
はのくのりのての神ととの宗のむの今の玉の神と号す
近の来のばのたののの堪の能也

爰の徳のののちのちのりのくのくの神ととの我の神ととの不のしのと

こらりりあふさそとひくんとおるゆき事
とむらうまこと新後撰の時新古今は兼
例として十七首入るれ然昔古と名卷
と云ぬるりえとあつるふ実際のはく三六
万首ある事と云うやみて己をの
三つと多讀りり月次一千首と云
事志々の其ゆとりとの優美ありす
おろろり一と事もう一とろり根の事
を斟酌よくへと由今宗近うろり
たつてい

東入る行氏と素還子毎月の百首としてよら
被うといふ更小勅撰ふえらとひ入ぬと物
見しとと被りし
故宗近云初めらり時い常に悉の
とよむる一ととふそけといてさ
何とといひあつるあり

右は井蛙物語都合六卷の頃阿自義
之中令書寫之加敷返校合年

寬正二年六月廿五日

洛陽东山隱士金剛寶因雅

以六卷文明十八年六月十七日常任法院殿心内書
仍然坐系備之俄於灯下書寫平
然同八月正中被返下堂而在出由
書曰伊勢守貞宗副狀在之者也

延治元年四月二日

江平判

廣利因雅

